

墓

正岡子規

青空文庫

○こう生きて居たからとて面白い事もないから、ちよつと死んで来られるなら一年間位地獄漫遊と出かけて、一周忌の祭の真中へヒヨコと帰つて来て地獄土産の演説などは甚だしやれてる訳だが、しかし死にツきりの引導渡されツきりでは余り有難くないね。けれど有難くないの何のと贅沢ぜいたくをいつて見たところで、諸行無常老少不定というので鬼が火の車引いて迎えに来りや今夜にも是非とも死ななければならぬヨ。明日の晩実は柳橋で御馳走になる約束があるのだが一日だけ日延ひのべしてはくれまいかと願つて見たとて鬼の事だからまさか承知しまいな。もつとも地獄の沙汰さたも金次第というから犢鼻褌ふんどしのカクシへおひねりを一つ投げこめば鬼の角も折れない事はあるまいが生憎あいにく今は十銭の銀貨もないヤ。な
いとしてみりヤうかとはして居られない。是非死ぬとなりヤ遺言もしたいし辞世の一つも残さなけりヤ外聞げいぶんが悪いし……………ヤア何だか次の間に大勢よつて騒いで居るナ「ビヨウキキトク」なんていう電報を掛けるとか何とかいつてるのだろう。ナニ耳のそばで誰やら話しかけるようだ、何かいう事ないか、いう事ないでもない。借金の事どうかお頼み申すヨ、それきりか、僕は鰻まんじゅう頭がが好きだから死んだらなるべく沢山盛つて供えてもらいたい、それは承知したが辞世はないか、それサ辞世の歌一首詠もうと思つたが間に合わ

ないから十七字に変えて見たがやはりまだ五字出来ないのだが、五文字出来なけりヤ十二字でも善いじゃないか 言つて見たまえ、そんなら言つて見よか「尻をひつて尻をすぼめず」というのだ 何か下五文字つけてくれ、笑つてちやいけないヨ、それじゃネ萩の花と置いてはどうだ、そりヤどういふ訳だ、どういふ訳もないけれど外に置きようはなしサ 今萩がさかりだから萩の花サ、そんな訳の分らぬのは困るヨ、じゃ君尻ひり虫というのは どうだ 尻ひり虫は秋の季になつてゐるから、尻をひつて尻をすぼめず尻ひり虫か そいつは余りつまらないじゃないか、つまらないたつて困つたナ それじゃこれではどうだ 尻をひつてすぼめぬ穴の芒かなサ、少し善ければそれで我慢して置いて安樂に往生するサ 迷わずに往つてくれたまえ、迷つたら歸つて来るヨ………イヤに静かになつた。誰やらクシクシ泣いてるようだ。抹香まつこうの匂いがしやアガラ。この匂いは生きてる内から余り好きでもなかつたが死んで後もやはり善くないヨ 何だか胸につまるようで。胸につまるといえばからだしきみが窮屈だね。こりヤ櫛しきみの葉でおれのからだを詰めたに違いない。棺を詰めるのは花にしてくれといつて置くのを忘れたから今更仕方がない。オヤ動き出したぞ。墓地へ行くのだナ。人の足音や車の軋きしる音で察するに会葬者は約百人、新聞流でいえば無慮むりょ三百人はあるだろう。先ずおれの葬式として不足も言えまい。………アアようよう

死に心地になった。さつき柩ひつぎを昇かき出されたまでは覚えて居たが、その後は道々棺で揺られたのと寺で鐘太鼓ではやされたので全く逆上してしまつて、惜かない哉木蓮屁茶居士などというのはかすかに聞えたが、その後は人事不省だつた。少し今、ガタという音で始めて気がついたが、いよいよこりや三尺地の下に埋められたと見えるテ。静かだつて淋しいツてまるで娑婆しゃばでいう寂莫せきばくだの蕭森しょうしんだのとは違つてるよ。地獄の空気はたしかに死んでるに違いない。ヤ音がするゴーというのは汽車のようだがこれが十万億土を横貫したという汽車かも知れない。それなら時々地獄極楽を見物にいつて気晴らしするもおつだが、しかし方角が分らないテ。めつたに闇の中を歩あるいて血の池なんかに落ちようものなら百年目だ、こんな事なら円遊くわに細くわしく聞いて来るのだツた。オヤ梟ふくろうが鳴く。何でも気味の善い鳥とは思わなかつたが、道理で地獄で鳴いてる鳥じゃもの。今日は弔とむらわれのくたびれで眠くなつて来た……もう朝になつたかしら、少し薄あかるくなつたようだ。誰かはや来て居るよ。ハア植木屋がかなめを植えに来たと見える。しかしゆうべまであつた花はどうしたろう、生花も造花もなんにも一つもないよ。何やら盛物もりものもあつたがそれも見えない。きつと乞食が取つたか、この近辺の子が持つて往たのだろう。これだから日本は困るといふのだ。社会の公德というものが少しも行われて居らぬ。西洋の話を聞くと公園の真中に

草花がつくつてある。それには垣も囲いもなんにもない。多くの人はその傍かたわらを散歩して居る。それでもその花一つ取る者は仮にもない。どんな子供でも決して取るなんという事はないそうだ。それが日本ではどうだ。白壁があつたら楽らくがき書するものときまつて居る。道端や公園の花は折り取るものにきまつて居る。もし巡査が居なければ公園に花の咲く木は絶ことえてしまふだろう。殊ことに死人の墓にまで来て花や盛物を盗む。盗んでも彼らは不徳義とも思やせぬ。むしろ正当のように思つてる。如何に無教育の下等社会だつて………しかし貧民の身になつて考て見るとこの窃盗罪の内に多少の正理が包まれて居ない事もない。墓場の鴉からすの腸を肥すほどの物があるなら墓場の近辺の貧民を賑にぎわしてやるが善いじゃないか。貧民いかに正直なりともおのれが飢える飢えぬの境に至つて墓場の鴉に忠義だてするにも及ぶまい。花はとにかく、供え物を取るのは決して無理ではない。西洋の公園でも花だから誰も取らずに置くがもしパンを落して置いたらどうであろう。きつとまたたく間になくなつてしまふに違いない。して見れば西洋の公德というのも有形的であつて精神的ではない………ヤ大勢来やがった。誰かと思えばやはりきのうの連中だ。アア深切なものだ。皆くたびれて居るだろうけれどそれにも構わず墓の検分に来てくれたのだ。実に有り難い。諸君。諸君には見えないだろうが僕は草葉の陰かげから諸君の厚誼こうぎを謝して居るよ。去

る者は日々に疎^{うと}しと行ってなかなか死者に対する礼はつくされぬものだ。僕も生前に経験がある。死んだ友達の墓へ一度参つたきりでその後参ろう参ろうと思つて居ながらとうとう出来ないでしまった。僕は地下から諸君の万歳を祈つて居る。………今日は誰も来ないと思つたら、イヤ素的^{すてき}な奴が来た。蘭^{らんじや}麝^{かお}の薫^{かお}りただならぬという代物、オヤ小つまか。小つまが来ようとは思わなかつた。なるほど娑婆に居る時に爪^{つまびき}弾^{さんき}の三下りか何かで心意気の一つも聞かした事もある。聞かされた事もある。忘れもしないが自分の誕生日の夜だった。もう秋の末で薄寒い頃に衾^{あわせ}に襦^{じゆばん}袷^{あはせ}で震えて居るのに、どうしたかいくら口をかけてもお前は来てくれず、夜はしみじみと更^ふける寒さは増す、独りグイ飲みのやけ酒という気味で、もう帰ろうと思つてるとお前が丁度やつて来たから狸寝入でそこころがつて居ると、お前がいろいろにしておれを揺^ゆり起したけれどおれは強情に起きないで居た。すると後にはお前の方で腹立つて出て往こうとするから、今度はこっちから呼びとめたが歸つて来ない。とうとうおかみの仲裁でやつとお前が出て来てくれた時、おれがあやまつたら、お前が気の毒がつて、あなたほんとうにあやまるのですか、それでは私がすみません、私の方からあやまります、というので、ジツと手を握られた時は少しポツとしたよ。地獄ではノロケが禁じてあるから深くはいわないが、あの時はほんとうにもう命もい

らないとまで思ったね。したがお前の心を探って見ると、一旦は軽はずみに許したが男のいう言は一度位ではあてにならぬと少し引きしめたように見えたので、こちらも意地になり、女の早はせぬといつたような顔して、疎遠になるとなく疎遠になって居たのだが、今考えりやおれが悪かった。お前が線香たててくれるとは実に思いがけなかった。オヤまた女が来た。小つまの連かと思つたら白眼みあいになれ違つた。ヤヤヤみいちゃんじゃないか。今日はまあどうしたのだろう。みいちゃんに逢つては実に合す顔がない。みいちゃんも言いたい事があるであろう。こちらも話したい事は山々あるが最う話しする事の出来ない身の上となつてしまつた。よし話が出来たところが今更いってもみんな愚痴に墮ちてしまふ。いわばいうだけ涙の種だから何んにもいわぬ。ただここからお詫びをするまでだ。みいちゃんの一生を誤つたのは僕だ。まだ肩あげがあつて桃われが善く似あうと人がいつた位の無垢清浄玉の如きみいちゃんを邪道に引き入れた悪魔は僕だ。悪魔、悪魔には違いないがしかしその時自分を悪魔とも思わなりましたみいちゃんを魔道に引き入れるとも思わなかつた。この間の消息を知つてる者は神様と我々二人ばかりだ。人間世界にありうち卑しい考は少しもなかつたのだから罪はないような者であるが、そこにはいろいろの事情があつて、一枚の肖像画から一編の小説になるほどの葛藤が起つたのである。その秘

密はまだ話されない。恐らくはいつまでたつても話さるる事はあるまい。かような秘密がいくつとなくこの墓地の中に葬られて居るであろうと思うと、それを聞きたくもあるし、自分のも話したいが、話して後にもし生き還ると義理が悪いからやはり秘密にしておくも善かろう。とにかく今日は艶福えんぷくの多い日だった。……………日の立つのは早いもので最もう自分が死んでから一周忌も過ぎた。友達が醜金きよぎんして拵こしらえてくれた石塔も立派に出来た。四角な台石の上に大理石の丸いのは少ちとしゃれ過ぎたがなかなか骨は折れて居る。彼らが死者に対して厚いのは実に感ずべき者だ。が先日ここで落ちあつた二人の話で見ると、石塔は建てたが遺稿は出来ないという事だ。本屋へ話したが引き受けるという者はなし、友達から醜金するといつても今石塔がやつと出来たばかりでまた金出してくれともいえず、来年の年忌にでもなつたらまた工夫もつくであろうという事であつた。何だか心細い話ではあるがしかし遺稿を一年早く出したからって別に名誉という訳でもないから来年でも出来さえすりや結構だ。しかし先日鬼が笑つて居たから気にならないでもないがどうせ死んでから自由は利かないサ。ただあきらめて居るばかりだ。時に近頃隣の方が大分騒がしいが何でも華族か何かがやつて来たようだ。華族といや大そうなようだ。が引導一つ渡されりや華族様も平民様もありやアしない。妻子珍宝及王位、臨命終時不隨者とい

うので御釈迦様はすました者だけれど、なかなかそうは覚悟しても居ないから凡夫の御みだい台様さまや御姫様はさぞ泣きどおして居られるであろう。可哀想に、華族様だけは長いきさせてあげても善いのだが、死に神は賄賂わいろも何も取らないから仕方がない。華族様なんぞは平生苦勞を知らない代りに死ぎわに際ぎわなんて来たらうろたえた事であろう。可哀想だが取り返しもつかないサ。正三位勲二等などと大きな墓表を建てたツて土の下三尺下りや何のききめもあるものでない。地獄では我々が古參だから頭下げて来るなら地獄の案内教えてやらないものでもないが、生意気に広い墓地を占領して、死んで後までも華族風を吹かすのは氣にくわないヨ。元來墓地には制限を置かねばならぬというのが我輩の持論だが、今日のように人口が繁殖して来る際に墓地の如き不生産的地所が殖ふえるというのは厄やっかい極まる話だ。何も墓地を広くしないからツて死者に対する礼を欠くという訳はない。華族が一人死ぬると長屋の十軒も建つほどの地面を塞ふさげて、甚だけしからん、といって独り議論したツて始まらないや。ドレ一寝入しようか。……………アア淋しい淋しい。この頃は忌日が来ようが盂蘭盆うらぼんが来ようが誰一人来る者もない。最も此こ処へ来てから足かけ五年だからナ。遺稿はどうしたかしらん 大方出来ないのは極つてる。誰も墓参りにも来ない者が遺稿の事など世話してくれる者はない。お隣の華族様も最う大分地獄馴なれて蚯蚓みみずの小便の味

も覚えられたであろう。淋しいのは少しも苦にならないけれど、人が来ないので世上の様子
 子がさつぱり分らないには困る。友だちは何として居るかしらッ。小つまは勤めて居るな
 ら最う善いかげんの婆さんになつたろう。みいちゃんは婚礼したかどうかしらッ。市区改
 正はどれだけ撈取はかどつたか、市街鉄道は架空蓄電式になつたか、それとも空気圧あつさく搾式にな
 ったかしらッ。中央鉄道は聯絡したかしらッ。支那問題はどうなつたろう。藩閥は最う破
 れたかしらッ。元老も大分死んでしまつたろう。自分が死ぬる時は星の全盛時代であつた
 が今は誰の時代かしらッ。オー寒い寒い何だかいやに寒くなつてきた。どこやらから娑婆しゃば
 の寒い風を吹きつけて来る。先日さきひの雨に此処の地盤が崩れたと見えて、こおろぎの声が近
 く聞えるのだが誰も修理に来る者などはありやしない。オヤ誰か来やがつた。夜になつて
 から詩を吟じながらやつて来るのは書生に違いないが、オヤおれの墓の前に立つて月明り
 に字を読んで居やがるな。気障きざな墓だなんて独り言いつて居やがらア。オヤ恐ろしい音を
 させアがつた。石塔の石を突きころがしたナ。失敬千万ナ。こんな奴が居るから幽霊に出
 たくなるのだ。ちよつと幽霊に出てあいつをおどかしてやろうか。しかし近頃は慾の深い
 奴が多いから、幽霊が居るなら一つふんじばつて浅草公園第六区に出してやろうなんてい
 うので幽霊捕縛あゐるに歩行あゐるいて居るかもしれないから、うっかり出られないが、失敬ナ、悠々

と詩を吟じながら往つてしまやがった。この頃此処へ来る奴にろくな奴はないよ。きのうも珍らしく色の青い眼鏡かけた書生が来て何か頻りに石塔を眺めて居たと思つたら、今度或る雑誌に墓という題が出たのでその材料を捜しに来たのであつた。何でも今の奴は只は来ないよ。たまに只来た奴があると石塔をころがしたりしやアがる。始末にいけない。オ―寒いぞ寒いぞ。寒いツつてもう粟粒の出来る皮もなしサ。身の毛がよだつという身の毛もないのだが、いわゆる骨にしみるというやつだね。馬鹿に寒い。オヤオヤ馬鹿に寒いと思つたら、あばら骨に月がさして居らア。

子規

○僕が死んだら道端か原の真中に葬つて土饅頭を築いて野茨を植えてもらいたい。石を建てるのはいやだがやむなくば沢庵石のようなごろごろした白い石を三つか四つかころがして置くばかりにしてもらおう。もしそれも出来なければ円形か四角か六角かにきつぱり切つた石を建ててもらいたい。彼自然石という薄ツペらな石に字の沢山彫つてあるのは大々嫌いだ。石を建てても碑文だの碑銘だのいは全く御免蒙りたい。句や歌を彫る事は七

里ケツパイいやだ。もし名前でも彫るならなるべく字数を少くしてことごとてんじ悉く篆字になしてもらいたい。楷書いや。仮名はな猶更おさら。

〔『ホトトギス』第二卷第十二号 明治32・9・10〕

青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二卷」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第二巻第十二号」

1899（明治32）年9月10日

※底本では、表題の下に「落語生」と記載されています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月6日作成

2011年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

墓

正岡子規

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>